

# 但馬・香美町御崎集落に関する研究

松本 滋

社会システム環境学大講座

A Study on Misaki-village in Kami-town, Tajima

MATSUMOTO Shigeru

Laboratories of Environment for Social System

**Abstract:** In rural areas, many villages are suffering from underpopulation, aging population. And some villages are disappeared. Misaki-village in Kami-town, Tajima, a small and inconvenient historical village, has balanced multiple generations and attractive village environment, and good community relationship. We think this is a model of sustainable community. And we searched conditions that make this village sustainable.

**Keywords:** rural village, historical village, underpopulation, sustainable community

## はじめに

バブル崩壊後の構造改革路線、言い換えればグローバルイゼーション、市場原理、競争原理が全国を覆い、地方の過疎地域は深刻な状況になっている。中でも農林漁業の一次産業が支えてきた中山間地域などは過疎化の域をこえて消滅の危機に直面しており、限界集落が大きな問題となっている。全国的な少子高齢化、人口減少もそれを加速する要因となっている。

人口減少が進めば、全国土に散在している居住地を集約せざるを得ないといった議論も、主に財政難に苦しむ自治体の行政効率の視点から進められている。一方で、人が住まなくなると地域の管理主体を失うことになり、資源利用、国土の環境保全の面から問題が危惧されるし、先祖代々居住してきた地域を離脱するのはきわめて困難なことである。そこにはそれぞれ固有の歴史や文化が積層しているからであり、それは国民的な遺産でもある。

本研究の対象地域である香美町もそうした典型的な過疎地域であり、多くの集落が存続の危機にさらされている。そうした中であって、御崎集落はきわめて困難な立地条件にあり、限界集落に相当する集落でありながら、数百年に及ぶ独特の歴史文化を背景に集落の活力を維持し、子どもも生まれるなど注目すべき事例である。本研究では、御崎集落の居住環境とその周辺地域環境、世帯やコミュニティの特徴を考察することによって、住み続けられる持続可能な集落の条件を見出すことを目的としている。もちろん、御崎集落で見出すことのできる条件は独特の特殊解としての

条件であるが、こうした条件には普遍的な一般解があるわけではなく、それぞれの集落の持続可能な条件とは特殊解の集合であると考えている。

## 1. 香美町香住地区御崎集落の概要

### 1.1 香美町の概要

香美町は兵庫県北部の但馬地方にあり、日本海に面しているが町域の大部分が山地で、その中を流れる矢田川とその支流の形成する谷筋や河口の平坦地に集落が散在している。2007年1月1日現在、人口は22176人、世帯数6902戸で、過疎化、少子高齢化が進んでいる。そうしたこともあって、香美町自体も、平成の大合併の施策の中で美方町、村岡町、香住町の旧3町（現在はそれぞれ小代区、村岡区、香住区となっている）が合併して2005年に誕生した新しい町である。

人口データについては新しい香美町ではまだまとめられていないため、旧3町の統計書を経年的にたどってデータを揃えた。1960年と2006年を比較すると、香美町の人口は66.4%に大幅に減少、世帯数は97.5%に微減し、大家族の多かった世帯も核家族、単身世帯に分解が進んでいる。この間、高齢人口は2倍に、出生数は1/3に減り、兵庫県の平均高齢化率16.9%に比べ香美町は10%も上回る26.9%に達しており、少子高齢化が著しい。【図-1参照】

有名な但馬の杜氏のように、但馬地域は以前から季節労働者として京阪神に労働力を供給してきたが、高度経済成長期以降は、主として若者が進学や就職のために京阪神など都会へ出て行くことによる人口減少が

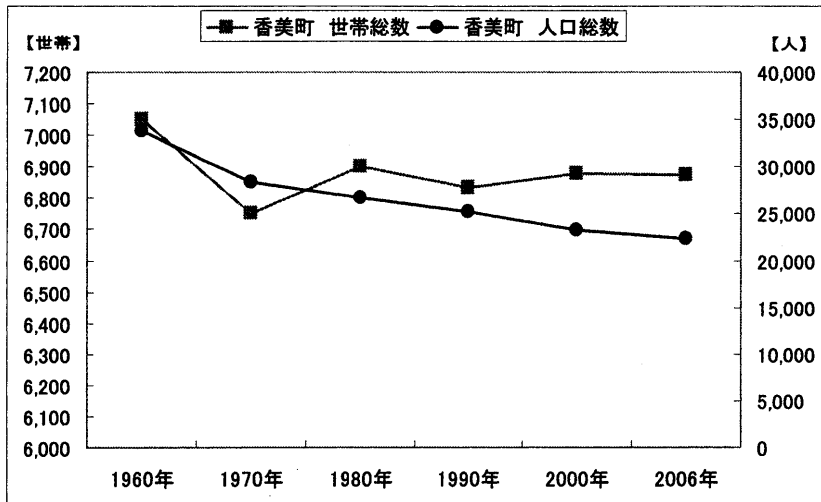


図-1 香美町の人口と世帯の変化

人口は高度成長期以降一貫して減少している。世帯の減少は大家族の世帯分解が進んだこと、若い世代や高齢の単身者が増えたことによってやや緩慢である。

(以下の人口等のデータは旧3町の統計書をまとめたものである。)

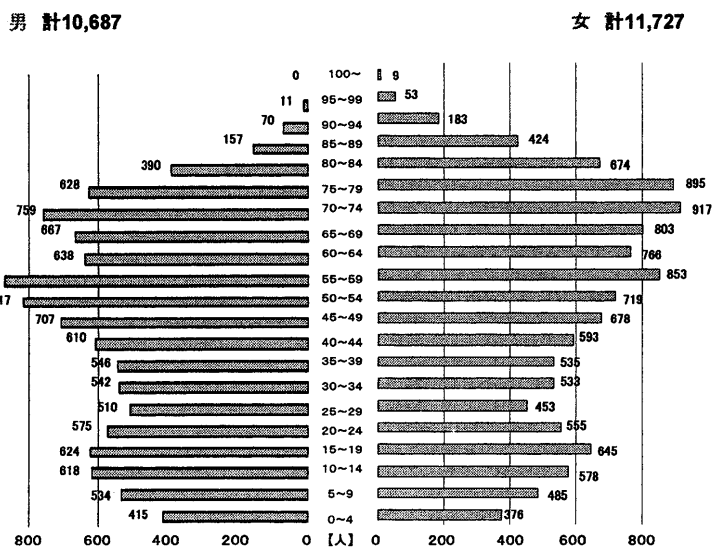


図-2 香美町の現在の人口ピラミッド 2006年

少子・高齢化が明瞭に示されており、女性では70代が団塊世代を上回り、最も多い世代となっている。都市への流出による20代へのこみは30代、40代になってもなかなか回復せず、そうした子育て世代の減少は、必然的に少子化を促進している。人口の再生産の仕組みが崩れてきている。

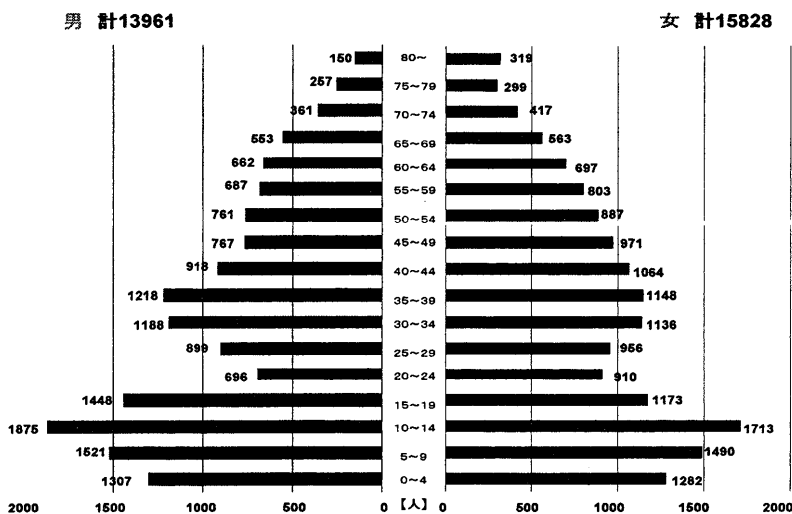


図-3 香美町の昔の人口ピラミッド 1965年

多産多死のピラミッド型をベースとしながらも20代に大きなへこみがあり、過疎地に特徴的なひょうたん型となっている。それでも当時は30代、40代になると故郷に還流し、子育てをしていた。

一貫して続いている。そのうちかなりの部分は30代、40代になって結婚や家業を継ぐために香美町に還流し、子どもを生み育てるといった人口の再生産システムが生きていた。しかし、最近の人口減少はこうした子育て世代の還流が減少し、人口の再生産システムが働かなくなっているという深刻な状況になっている。老親の介護や、家業や資産の継承のため定年後に還流することはあっても、それは人口の再生産には結びつかないのである。[図-2、図-3参照]

香美町の産業は、従来は豊かな自然を生かして、但馬牛で知られる牧畜などの農業、カニなどで知られる漁業、そして林業といった一次産業、そしてそれらを加工する二次産業、海水浴、釣りやスキーなどの観光が主たる産業であった。しかし、一次産業は衰退しており、二次産業や観光も停滞傾向にあり、但馬の中心都市である豊岡周辺に通勤する人が増えている。

香美町の居住地は集落によって構成されている。そのうち香住など市街地を形成している集落は少数で多くは独立集落である。集落は全町で118あり、香住区に47、村岡区に50、小代区に21集落ある。世帯数10未満の集落が5、10～50未満の集落が77、50～100未満の集落が21、世帯数100以上の集落は15であり、小規模の集落が多い。118集落のうち人口が増えないし停滞している集落は24集落であり、多くの集落は人口も世帯数も減少している。中でも、①小規模な集落、②幹線道路から離れた交通の不便な集落、③旧町の中心部、商店、学校、病院といった生活サービスから離れた不便な集落、④山間地の斜面地にあり、標高が高いため積雪が多く、日当たりも悪く、鹿、猪などの獣害の多い集落、などは危機的な限界集落となっている。統計上は消滅集落はないが、実際には居住実態はなく家屋敷や墓地の保全のために通っている例や冬季には居住者がいない集落も現れている。

## 1.2 御崎集落の概要

御崎集落は香美町香住区の日本海に面する伊笹岬の先端、海拔約170mに位置する全21戸、17世帯、67人が暮らす孤立した小集落である。集落へのアクセス道路は、最寄りの集落であり余部鉄橋で有名な余部までの約3kmの断崖沿いの一本道しかない。但馬の中心都市豊岡からは約40km、香美町の中心市街地である香住までは約10kmの距離にある。道路開通までは秘境と言われていた。[図-4、図-5参照]

山が海岸まで迫る断崖の急傾斜地にへばりつくように張りついた集落には平坦地はほとんどない。岬の先端に位置していて日本海が一望でき景観に優れている。

御崎集落は、壇ノ浦で敗れこの地に流れ着いた平家の武将たちが作った平家落人村であると言われている。当初は現在よりもさらに山奥にあり、隠れ里としてわざわざ他者の寄りつかない不便な地域を選んだわけである。伊賀、矢引、門脇の三武将の家系の子孫たちがわずかな田畑を開墾して代々住み続けていた。江戸期に現在地に移転したが、それでも僻地の秘境であることに変わりはない。

明治以降も茅葺平屋の民家が密集して集落を形成していたが、明治期に2度火災にあい、そして大正期の1915年に全集落を焼失する大火があり集落住民はすべてを失った。関西の平家の末裔を中心に全国的な支援を得て復興に立ち向かった。当時の支援は義捐金のほか、食料、衣料、わらじやクワなどもあったと言う。今も集落には支援物資目録が残されている。この後集落の住宅は瓦葺きで復興されていった。

明治以降、ほかにも以下のような動きがあった。

- ・明治中期に集落内に寺子屋が設けられ、集落内外の子弟の教育にあたった。大正の大火で消失後集落のはずれに再建され、後に小学校の分校になった。分校は1984年に道路整備とあわせて集落内の現在地に移転された。平家武将の末裔ということからも子弟の教育には熱心であったようである。

- ・集落の水は、集落から100mほど崖を降りた所にある湧き水によっていた。水量は十分にあったが、毎日の水汲みは子どもたちの重要な仕事で学校から帰ると宿題より優先して行わなければならない重労働であり、水はきわめて貴重なものであった。火災時の消火用水はなかった。昭和戦前期の1936年になって、湧き水が海に落下するエネルギーを利用した水力揚水ポンプが考案され、集落に貯水槽が設けられ水道が引かれた。これらも住民の負担と労力によっていた。現在は町営水道として電動ポンプによって揚水し、塩素消毒も行われており、消火栓も整備されている。

- ・戦時中に日本海を監視するため軍の監視所が集落の上の現在の御崎灯台の位置に設置された。そこで利用する電力の一部を集落にも通して1942年に周辺の余部集落などよりもずっと早く電気が開通した。監視所の兵隊の好意で手作りのラジオも提供されたという。

- ・集落は長らく30戸程度で推移してきたが、終戦直前には、都市から疎開してきた親戚なども加え、集落は48戸、約250人と最大規模となった。中には10人で住む家もあった。その後、疎開者が都市へ戻ると1960年頃には35戸程度となり、これが安定したスタンダードな集落規模と考えられる。しかし、高度経済成長期には

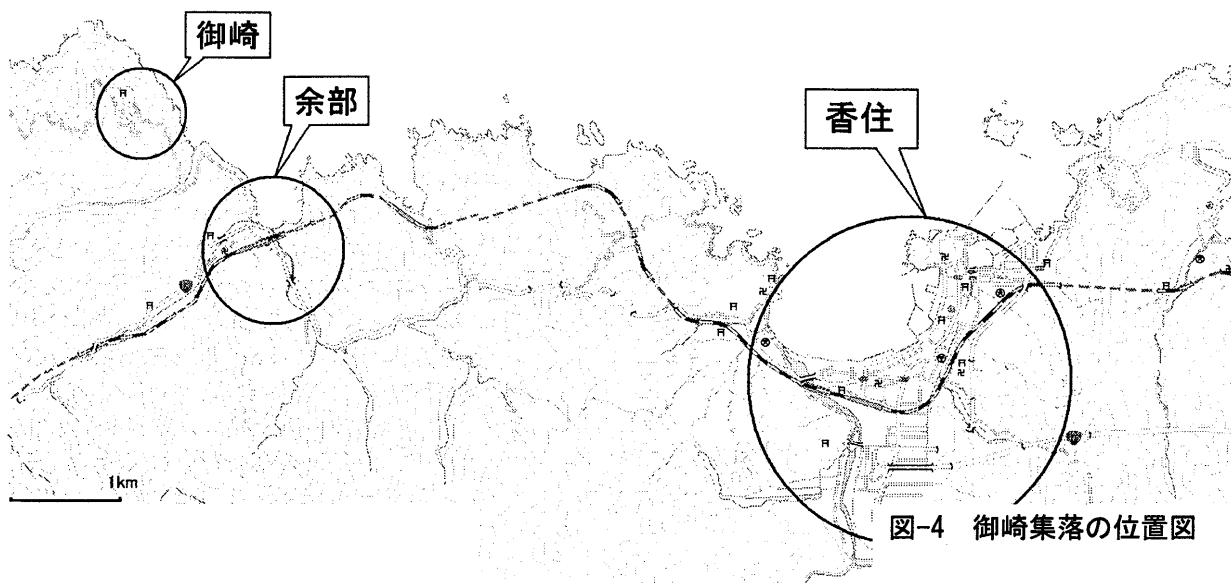


図-4 御崎集落の位置図

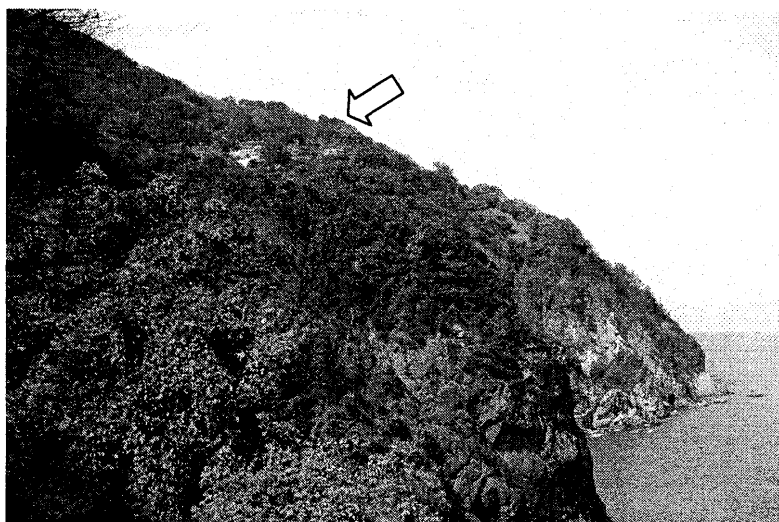


図-5 御崎集落の遠景

余部からのアクセス道路から遠望したもの。どうしてこんなところに集落が？と驚くべき急斜面に張りついている。集落の下は断崖が海に落ち込んでいる。

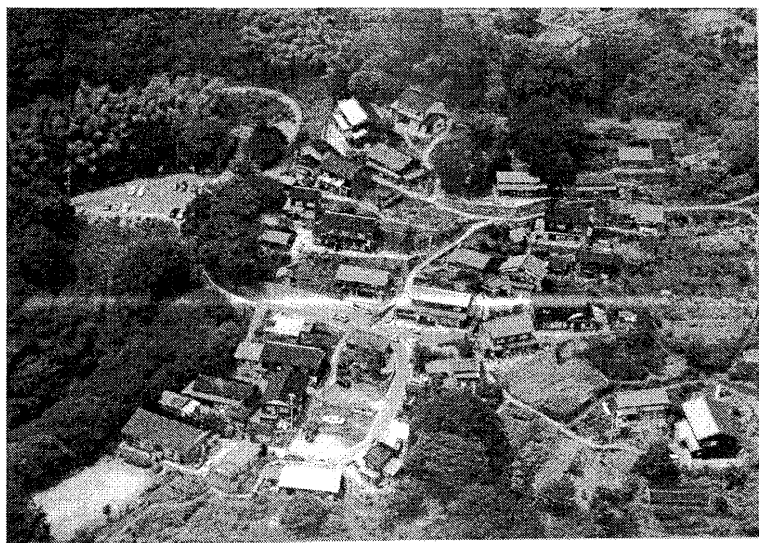


図-6 御崎集落の空撮 1996年

東から西を望んだもの。左下に御崎分校、左上が駐車場、中央上の木立ちの中に神社がある。中央下のタブの大木2本が伐採されて今はない。

御崎の生活に見切りをつけて転出する人が増え、1963年の「サンパチ豪雪」では御崎集落でも3mの積雪によって孤立してしまい、自衛隊のヘリで食料など支援物資の投下を受けた。これを契機として、折からの高度成長期の農村から都市への「民族大移動」の全国的な流れに乗り、15世帯ほどが転出し、集落の世帯数は30戸を下回るようになった。

・御崎集落から最寄りの国道の走る余部集落までは、断崖絶壁に設けられた幅1mもない狭い道しかなかった。すべての物資は人の手で徒歩で運んだ。住宅の建設資材などは海から集落総出で担ぎ上げたという。通学する子どもたちは一列縦隊で前の子の帯をつかんで通っていた。ここに自動車も通れる道路を建設することが集落の悲願であった。戦後まもなくの1949年から、重機もなくツルハシやクワやモッコによる手作業で、住民や近くの高校生の勤労奉仕もあって20年の歳月をかけて1970年に砂利道が開通し、1972年に舗装道路になり、その後、集落内の小学校までの道路と駐車場が設けられた。こうして御崎集落は秘境の孤立集落から脱し、住民も競って運転免許とマイカーを手に入れるようになり、集落の暮らしは一変した。とはいえ、この道路も車がすれ違える場所は少なく、観光バスが迷い込んで立ち往生したこともあるという。また、落石や土砂崩れも多く、本研究で調査している間も2度にわたって通行止めとなっている。道路改修が御崎集落の最大の課題となっている。

・御崎集落だけでなく余部集落も含めて最寄り駅は余部駅であるが、この駅は1959年に設けられた。それまでは国鉄を利用するには余部集落から線路まで山の斜面を登って、線路伝いに高さ40mをこえる余部鉄橋を渡り、トンネルをくぐって隣の鎧駅まで危険な道を行かなければならなかった。小学生たちの熱望がきっかけとなり、住民総出の勤労奉仕の末に余部駅が設置された。現在では御崎集落の人たちは自動車が利用できる。JRを利用する時も斜面を登らなくてはならない余部駅はほとんど利用せず、特急も止まる香住駅を利用している。

・その他に、2004年に下水浄化センターが設立され、2006年度中に集落内の下水化が完了する。2005年には集落の中心に木造平屋の立派なコミュニティセンター（公民館）が設立され、住民活動の拠点となっている。

・このように、御崎集落は香美町の中でも圧倒的に不利な立地条件と相次ぐ災害に会いながら、高度成長期の転出によって住民が半減したけれども、現在まで比較的安定した集落として維持されてきた。

## 2. 居住環境の特徴

### 2.1 御崎集落とその周辺環境

御崎集落は東面が日本海に面している。海拔168~180mの斜面にあり、集落の下は断崖となっているため直接海にアクセスすることはできない。後背地は山地である。山は北斜面であるが、岬であるため眺望も日当たりも良い。その中を曲がりくねった道路が走っており、道路の3km南には余部集落、北には約500mのところに無人灯台があり、それを経て浜坂町三尾集落に通じている。この道路は自然遊歩道に指定されているが、御崎集落から灯台までは自動車道路を離れて集落内の細街路や畑の畦道を利用している。半径3km圏内に他の集落はない孤立集落である。

集落の周辺はほとんど急斜面の雑木林の山林である。一部に杉の植林もあるが放置されている。その一部のやや緩斜面の部分が山椒畑となっている。南に約1kmのところの小川が流れていてその谷筋に以前は棚田の水田があったが、そこも山椒畑となっている。集落のまわりには小規模な菜園が作られている。

集落そのものは東西南北とも約150mの大きさである。その中に21軒の住宅とその附属屋のほか、西の端に平内神社と配水槽、東の端に小学校（御崎分校）と下水浄化センター、北の端に墓地や菜園、南の端に駐車場、バス停、ポンプ場があり、集落内部に燈籠、コミュニティセンター、食堂店舗（平家の里）、消防倉庫などが散在している。きわめて高密度な居住空間を構成している。このため過去の大火では、水利の便が悪かったこともあって萱葺き屋根の集落はまたたくまにすべて消失してしまった。なお、寺は集落内にはなく、余部集落の寺の檀家となっている。[図-6、図-7参照]

### 2.2 斜面集落としての特徴

集落内は、集落入り口の駐車場から東の端にある分校までと消防倉庫までは自動車の通行可能な幅員6~7mの舗装道路が二本走っているが、その他の街路は1m程度の細街路が斜面地形に順応して曲がりくねった迷路のようなネットワークを構成している。しかも、集落は西から東に向かって高低差30m程度の急斜面になっており、敷地は階段状に設けられ、細街路も相当な斜度がある。そのため集落では自転車やバイク、車イスは使えない。[図-8、図-9参照]

東端の小学校から西の端の神社まで集落の中央を貫く集落のメインストリートがあり、祭りの時には多くの人が練り歩くが、それでも狭く曲がりくねった急斜面の道である。こうした斜面が御崎集落の空間構成を独特のものにしている。

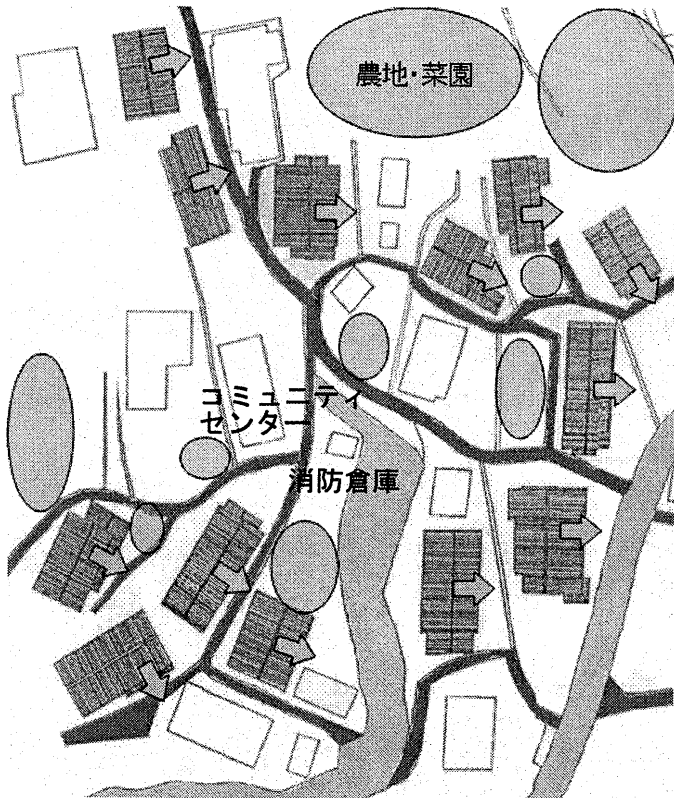


図-7 街路と住戸の構成

複雑に張りめぐらされた狭い街路網、密集した住戸。この図の左手に平内神社、下に駐車場、右手に分校がある。矢印は住戸の開口部が向いている方角。ほとんどの住戸は斜面にあわせて海の見える東に面している。

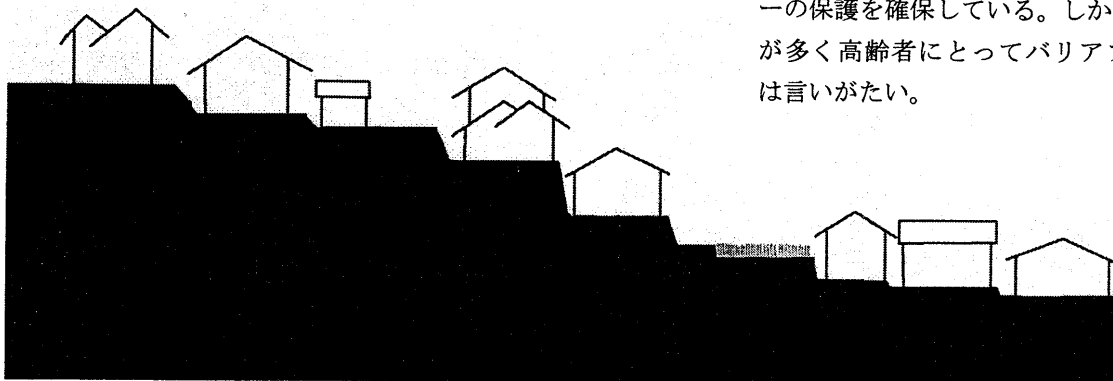


図-8 集落東西断面図 右が東

斜面を階段状に造成して宅地としている。隣家とは近接しているが、段差によって眺望、日当たり、通風、プライバシーの保護を確保している。しかし、段差が多く高齢者にとってバリアフリーとは言いがたい。

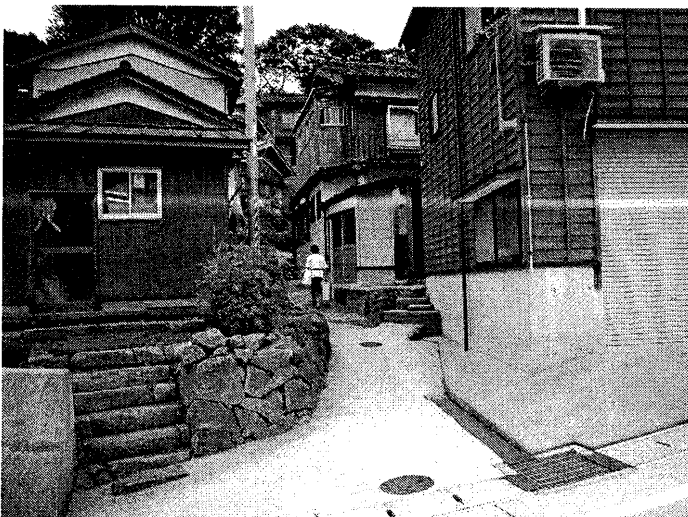


図-9 集落内街路

街路は簡易舗装されているが、狭く曲がりくねっていて、先を見通すことはできず、角を曲がると次々と新しい景観が現れる。初めての訪問者はあっというまに方向感覚を失う。

### 2.3 御崎集落の景観の特徴

御崎集落は景観に優れた集落である。特に優れた観光の対象物があるわけではないが、居住者や訪問者に感動を与える景観の質を持っている。集落の景観を周辺の地形全体を見渡す大景観、集落内の中景観、住戸や街路のスポット的な小景観に分けて考察する。

#### 【図-10、図-11参照】

**大景観:**集落は海拔約170mの断崖上にあるため、日本海を水平線まで180度の視界におさめることができ、季節によっては水平線から日が昇り日が沈むのを見ることができ、但馬の海岸美と東にははるか丹後半島、西には隠岐島を望むことができる。季節、時間によって海や空の表情は刻々と変化して見ていて飽きることがない。これだけの広大な景観を持つ集落は貴重なものと考えられる。

逆に集落をアクセス道路や海上から遠望すると、海岸から切り立つ山塊の中腹にしがみついている集落の景観も人の心を動かすものである。このため、「平家落人集落」という秘境イメージも重なって、少数ではあるが観光客が訪れ、写真撮影や写生をする人も見られる。

**中景観:**集落内の景観は、曲がりくねった細街路と斜面がもたらす変化に富んだ景観が特徴である。木造の分校の校舎、鎮守の森に囲まれた神社、路傍に建つ灯籠、手入れの行き届いた菜園、タブの大木などいくつかのスポットもあるが、一つひとつはそれほど貴重なものとは言えない。それよりも、街路の角を曲がる、坂道を登ったり降りたりするごとに突然別の景観が姿をあらわす三次元的な動的な変化が魅力となっている。狭いにもかかわらず半日集落内を歩いていても集落空間の全容を理解することは難しいほどである。そして常にこうした中景観の背景には海や山の大景観があるのである。

そして何よりも、観光地となった所と違って、子どもが遊んでいたり、老人が畑を耕していたり、主婦たちが立ち話をしていたり、この集落が暮らしの場として息づいていることを感じさせることが大きな魅力である。

**小景観:**住戸も町並み保存に値するほど価値あるものではないし、街路もモルタルを流しただけのもので一つひとつだけでは魅力的とは言えない。それでも歴史を感じさせるスポット、生活感のあるスポット、樹木や草花などの自然を感じさせるスポットなど景観の多様性が特徴となっている。しかし、石垣がコンクリートに変わったり、ガードレールが多用されたり、むき

出しのガスボンベが置かれたりと景観上好ましくないものも多く見られる。

調査期間中に、そば屋の建物を包むようにそびえていた樹齢数百年もの見事なタブの大木が伐採されてしまうという事件があった。私たちはあ然としたが、落ち葉などが墓地に落ちて掃除が大変だし、大きすぎて枝の剪定もままならないという理由で、区でかなりの負担をして専門業者に伐採してもらったという。集落の住民の景観に対する意識がそれほど高くないことを示す事件であった。

### 2.4 御崎集落と観光

景観は観光資源として議論されることが多い。香美町の観光パンフレットやホームページにも「御崎平家の里」として紹介され、メジャーではないけれども秘境もしくは観光の穴場といった評価をされている。但馬全体が多くの観光地を持っており、また、近くに御崎灯台や余部鉄橋という比較的メジャーな観光資源があり、特に2006年は翌年から余部鉄橋の架け替え工事が始まることもあって、最後の余部鉄橋を見ようと全国から多くの観光客やカメラマニアが訪れ、休日には渋滞が発生してガードマンが配置されるほどであった。その一部が御崎集落を訪れることもあった。また、1月の「百手の儀式（ももてのぎしき）」の祭りには従来から多くの観光客が訪れている。ただし、御崎への道路は幅員が狭く曲がりくねっているため、観光バスは進入できない。そのため、団体客はなく、観光客の数は少ない。灯台も日本で最も標高の高い位置にある灯台として、その白い姿と日本海を一望する絶景がかなりの人を集めている。また、近畿自然歩道日本海ルートの但馬御火浦いさり火の道が整備され御崎集落の中を通過している。（ただし、実際に歩く人は少なく、その多くは集落の脇を通り過ぎて自動車道路を歩いている）

御崎集落の観光資源としては以下のような点があげられる。

- ・広大な日本海の絶景

ただし、集落は絶壁の上であり、海岸美を間近に愛でたり、釣りや海水浴を楽しんだりすることはできない。

- ・平家落人集落としての歴史

ただし、それを示すものは説明の碑くらいで、具体的な物的歴史資源は乏しい。

- ・周囲の山や集落内の大木などの緑と自然

- ・三次元的に入り組んだ街路や密集した集落

自動車が入り込まず、次々と風景が変わる集落空間は独特の魅力がある。ただし、住宅は古いものではなく、

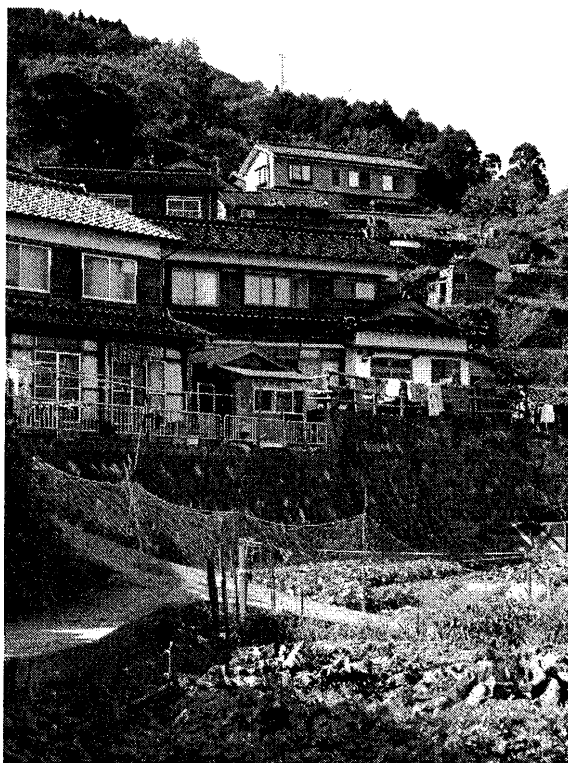


図-10 菜園から見た集落の住戸群

急斜面のため下から見上げても二階の窓は見えている。ほとんどの住戸は斜面にあわせて海の見える東に面している。住戸の多くは木造2階建て、下見板張りに黒い瓦屋根。



図-11 集落の麓越しに東に但馬の海岸を望む

集落のどこからもさまざまな表情の海を眺めることができる。



図-12 典型的な御崎集落の住宅

木造総2階建て、縦棧のある押縁下見板張りとして上部は漆喰塗りの壁、切妻屋根に黒い塗り瓦の典型的な伝統的スタイルである。

入り口の方角は街路との接続で決まるが平入りが多い。このお宅も海に向かって開いていて、日本海の絶景を眺めることができる。敷地が狭く庭はほとんどないが、菜園が集落の周辺にある。



伝統的な様式で統一されているわけでもなく、いわゆる伝統的町並みとしての魅力には欠ける。

- ・平内神社、御崎分校などの建築物

これらも特に価値のある建築物ではない。

- ・集落の暮らし方とコミュニティの親密さ

- ・特産品は山椒の葉であるが、期間が1ヶ月と短く山椒だけでは土産物にもなりにくい。山菜の佃煮なども作ってそば屋に置いているがごくわずかである。今のところ観光資源となりうるほどの特産品はない。

- ・唯一の観光施設であるそば屋「平家の里」

ただし、そばが特産であったり独特の手打ちそばというわけではないし、観光客が少ないため予約しておかないと休業の日も多い。経営者はもっと観光客を呼びたいとパン焼きを学んでパンとコーヒーを提供したいと準備している。

集落住民も観光客を増やしたいとは考えているが、それは集落に活気を生み、集落への誇りを再確認することであり、また若い人が戻ってくる契機となればと期待しているからである。いわゆる観光地として多数の客を誘致して、観光を集落の主要産業として期待しているわけではない。マス観光の対象として外部資本も入れて「観光地」化してしまうと、逆に御崎集落の魅力の多くは失われてしまうだろう。

## 2.5 御崎集落の住宅の特徴

21戸の住宅のうち3戸は独居高齢者が町外の子どもの家に引き取られたりして空家で、高齢者が入院で留守世帯が1戸となっている。廃屋や空地も数ヶ所ある。

住宅の主な特徴として以下の点が上げられる。

- ・住戸の敷地はほぼ40坪程度で、平家武将の血筋の本家と分家でも大きな差はない。ほとんどすべての住戸はその敷地いっぱい建てられており、庭を持つ住戸はほとんどない。

- ・隣接する敷地は斜面のため1~2m程度の段差があり、石垣の擁壁となっているが最近ではコンクリートで固められた部分も見られる。

- ・住戸同士は高蜜に近接しているが、隣家の敷地とは段差があるため、圧迫感はなく、日当たりや通風、プライバシーも確保できる。そして、住戸は南面せず、東下がりの斜面にあわせていずれも東面に向けて開いており、どの家からも海が眺められる。

- ・住戸の多くは、木造総二階建てで、香住地方独特の土壁に押縁下見板張りの壁、雪止めのある黒の塗り瓦の切妻屋根である。[図-12参照]

- ・大火にあったこともあり、建築年数は古くない。ほとんど戦後に建て替えられている。ほとんどは周辺の

地元の大工によって建設されており、アクセス道路や敷地条件が厳しいためハウスメーカーの進出は見られない。したがって、伝統的な工法が引き継がれてきたが、最近になって建て替えられた住戸では現代的なサイディングの外壁、ルーフィングの屋根など伝統からはずれた住戸となっており、集落の町並み景観は統一性を失いつつある。

- ・住戸の床面積は90~200㎡程度である。敷地に比べるとかなりの広さを確保しているが、後述するように、この集落では親世代と子世代の同居世帯が多く、また年中行事の時には多くの親戚が宿泊することもあり、そうした世帯では必ずしも広さは十分とは言えない。

- ・住戸の間取りの多くは西日本の典型的な農家住宅の間取りである田の字型をベースとしたものである。昔の土間にあたる部分は水回りの部屋となっている。多世代同居や親戚の宿泊に対応できるよう畳の部屋が並ぶ融通のきく間取りが多い。概ね、1階が親世代の居住部分、2階が子世代の居住部分となっている。しかし、最近建て替えられた住戸では、同様に1階が親世代の居住部分、2階が子世代の居住部分となっているが、間取りは個室を備えたnLDK型となっており、夫婦の寝室以外は洋室となっている。世代交代に伴って今後の建て替えではこうした洋風化が進行し、住戸デザインも伝統が失われる可能性もある。

### [図-13、図-14参照]

- ・住民の意見を聞くと、「30年前に比べると住まいはよくなった」「今の住まいに満足している」という意見が多かった。しかし、昔に比べるとマシになっているが、不満がないわけではなく、「間取りの使い勝手の悪さ」「客間・居間が狭い」「収納不足」「階段がきつい」などの不満があげられ、「近い将来増改築・リフォームを予定」「近所の空地を手に入れて敷地を広げたい」「もっと近代的な住居にしたい」という意見も見られた。

- ・御崎集落は、跡継ぎ男子が集落外から嫁をもらって親と同居することによって支えられてきた。今後も香住など町場から嫁に来てもらうにはプライバシーを重視した都市的な洋風の生活に適した住戸に変化していくことが必要なのかもしれない。トイレの水洗化は完了したが、今後は住戸全体に大きな変化が進むことが予測される。

そうした場合に、集落の景観をどのように保全していくかが課題となろう。

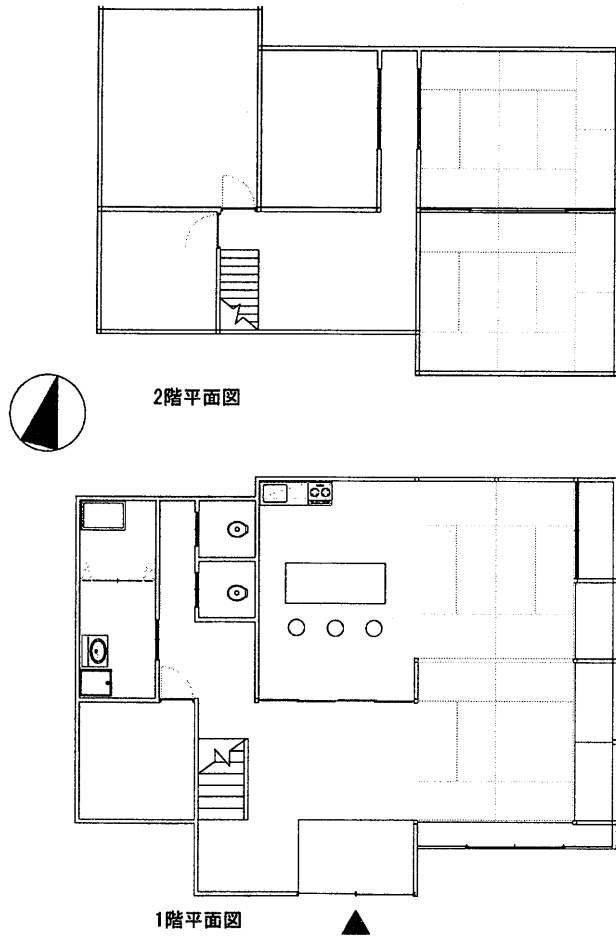


図-13 田の字型変形プラン

12年前に建てられた木造総2階建て、押縁下見板張りと上部は漆喰塗りの壁、切妻屋根に黒い塗り瓦。

水回り以外はほぼすべて畳敷きの典型的な田の字型住宅もあるが、この住宅は田の字型の土間部分と座敷の半分に床が張られ、水回りとDKとなっており、2階も個室化が見られる。床面積92㎡に親夫婦と子夫婦の4人で住んでいる。親夫婦のための田の字型と子夫婦のためのnLDK型の折衷プランとなっている。この他に、転出した隣家を農具などの倉庫や農作業場として使っている。盆正月や祭りには多くの親戚が滞在するため広い畳の部屋が欠かせない。

この住宅は火災を避けるため集落から少し離して建てられたため、斜面の向きが異なり、南南東に面している。

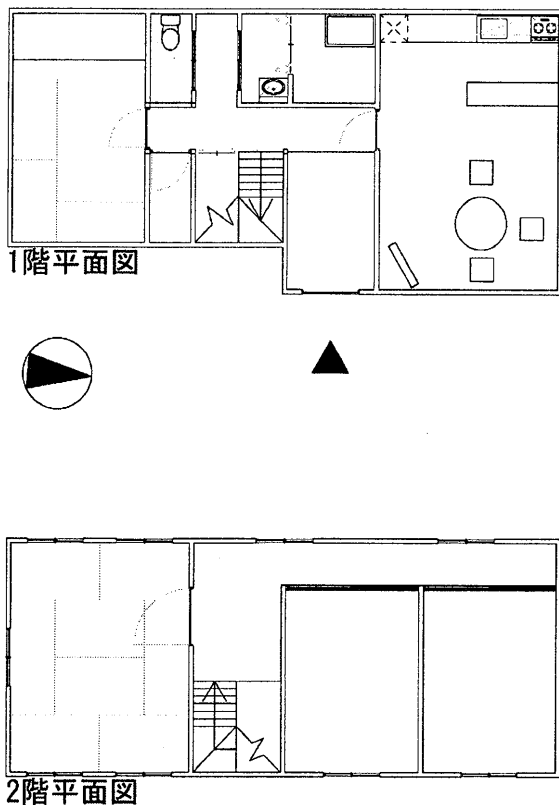


図-14 新しいnLDK型プラン

親夫婦の家に新婚の息子夫婦が同居するため最近建て替えられた最も新しい住宅である。木造総2階建て、サイディングの壁、ルーフィングの切妻屋根で、都市と変わらないデザインである。

床面積は約90㎡。1階にLDKと親夫婦の和室、2階が子夫婦と客室になっている。まだ子どもがいないので狭くはないが、子育てには工夫がいるかもしれない。この住宅は東面していて、リビングに座って日本海の絶景を眺めることができる。

### 3. 御崎集落の暮らしの特徴

#### 3.1 世帯と家族の特徴

2006年現在、御崎の住民は67人、男31人、女36人である。60代以上を親世代、30～50代を子世代、20代以下を孫世代とすると、親世代が22人、子世代が25人、孫世代が20人となっている。孫世代のうち、4人が乳幼児、小学生が7人である。最盛期に比べると人口は減ったとはいえ、性別、世代別ともきわめてバランスのとれた構成となっており、次世代の再生産も途切れることなく維持されている。

香美町の過疎集落の多くが高齢化が進み、子どもがほとんどいなくなっている状況と比べると、御崎集落がまだまだ安定したサステイナブルなコミュニティとして維持されていることが分かる。

世帯の特徴をみると、17世帯中12世帯が親世代と子世代が同居しており、そのうち8世帯は孫世代もいる三世帯世帯である。その他、親世代だけの老夫婦世帯が2、子世代夫婦だけ、高齢者独居、子世代独居の世帯が各1世帯ある。世帯の平均人員は3.9人であり、5人以上の世帯が9世帯もある。この面からも、高齢夫婦、高齢独居世帯が増えている他の過疎集落とは趣を異にしている。さらに、このうち高齢者独居世帯については近いうちに定年をむかえる息子が同居を予定している。また、過疎地では「嫁不足」と言われる結婚難から30代、40代の独身男性が多いが、御崎では3人程度で比較的結婚率が高い。御崎には嫁に行ってもよい、そこで子育てしてもよいと思わせるだけの魅力があるものと想像される。

一般的には、嫁姑問題もあり、親世代と子世代の同居は減っており核家族化が進行し、せいぜい隣居、近居が多いのに対して、御崎集落の同居は特異な現象と考えられる。多くの場合、跡継ぎ男子が若い時にいったん家を出て香住や豊岡や京阪神などで働いている時に伴侶を見つけ、その後実家に戻ってくるというパターンである。既婚女性の多くは集落外から嫁に来た人である。高齢者を含めて若い時期にはいったん御崎を離れて、その後に戻ってきた人が多い。御崎に戻ってきた理由として、「家や墓を守るため」「親孝行のため」「御崎で暮らしたい」「家業のため」などがあげられていた。今後は、団塊世代の定年退職に伴って親の介護のための里帰り同居なども増えるかもしれない。また、大家族には必ずしも十分でない住戸の条件からみて、いくつかある空地を利用した隣居も可能性がある。

こうした同居は、親の世代は代々大変な苦労を続け

て引き継いできた由緒ある御崎での暮らしに誇りを持って次の世代に渡したいであろうし、若い世代から見ると、住宅が保証されていること、世帯の稼ぎ手が多く収入が安定していること、子育てを手伝ってもらえるため夫婦で働き続けられること、環境やコミュニティが良いことなど、積極的に評価できる点が多いようである。相続するにしても住み続けていけば価値はあるが、手放すと市場価値は期待できないこともあるだろう。

嫁姑問題についても、夫婦共働きが多いので四六時中顔をつきあわせるストレスはないし、経済的にも自立性が高いこと、家族内の生活だけでなく集落コミュニティでの生活の比重が高いため、嫁姑間で煮詰まってしまうことがないという開放性の高い家庭生活が問題を深刻化させないのではないかと推測される。

#### 3.2 世帯の収入

御崎集落への道路が開通するまでは、農業と漁業が主たる生業であり、自給自足に近い暮らしが営まれていた。人々は「平家の落人」集落としての強固なコミュニティを形成し、互いに労働力を寄せ合い助け合って生活していた。「親方制度」と呼ばれる仮親制度や御崎信用組合という相互扶助金融制度も設けていた。住宅の建て替えや事業資金はここから得ていた。農業は米作が基本で、麦やそばも栽培していたが、水利の悪い棚田では不利であり、現金収入が必要になるにつれ戦後には養蚕や牧畜に取り組んだ時期もあった。いずれも集落で協力して取り組んだものである。養蚕の時期は家族の生活を犠牲にしても家の中に蚕棚を設け、毎日何回も遠い桑畑から桑の葉を大量に運ぶため、年寄りも子どもも総動員で働く必要があった。いずれにしても、決して豊かな暮らしではなく、集落全体で助け合わなければ生きていけなかったのである。

その後、ピーマン、しいたけ、ふきなどを少量出荷したこともあったが、現在では自家消費のための菜園の他はすべて山椒畑になっており、農協を通じ集落でまとめて出荷している。これも集落住民の商品作物を工夫する試行錯誤の末に軌道に乗せたものである。御崎の山椒は市場ではかなりのシェアをしめているが、収穫時期は初夏の1ヶ月に限られ、斜面の畑で刺の多い山椒の木から手で収穫するのは重労働だが、多い人でも一人当たり120～150万円程度の収入にとどまっております。元気な高齢者の年金に加える副収入程度の位置づけになっている。菜園での収穫は自家消費のほか、近所に配ったり、都会の親戚に送って喜ばれている。

漁業も昔は集落に近い船着場から小船で小規模な漁

をしていたが、戦後からは周辺の3集落共同で御崎集落の沖合いに定置網を設置して、余部漁港から出漁している。これも以前は全戸に配当金があるほどの収入があり、一日で1千万円の漁獲があがったこともあったが、近年は漁獲が減り赤字状態で、御崎で三人いる漁船乗組員に月20万円の給与を保証するのが精一杯という状況となっている。美しく見える日本海もその波底は相当荒れているのである。

このように、御崎内の生業だけで食べていくことは不可能になっていたのである。高度成長期には現金収入を求めて10数戸が集落から転出したのも必然的な結果であった。

こうした状況の転機になったのが、1970年の余部集落までの道路開通であった。御崎集落は道路ネットワークに接続され、陸の孤島、孤立した秘境ではなくなった。自動車さえあれば香住や豊岡に通勤することが可能になったのである。集落では運転免許とマイカー取得の大変なブームが起きた。

現在では、ほとんどの子世代の夫婦とともにマイカー通勤で集落外で収入を得ている。漁業従事者も通勤して給与を得ている。また、集落内で建設関連業を営んでいる人も集落外の現場で仕事をしている。単純化すれば、御崎集落の典型的な世帯の収入は、子世代の夫婦の集落外で得る給与と高齢夫婦の年金と山椒栽培の収入を合わせたものになっている。高齢夫婦の菜園の収穫も家計の助けになっている。

経済生活で見る限り、以前のようなコミュニティ全体で支えあう仕組みはなくなり、各世帯の家計は独立しているが、世帯の家族みんなで収入を寄せ合って暮らす仕組みが作られている。過疎の但馬地域では給与条件の良い雇用はきわめて少ない。主婦のパートタイムを含み、一人ひとは少ない給与であっても、収入のある人が複数いれば世帯収入としてはかなりのレベルを確保できる。ここに、御崎集落で同居世帯が多い最大の理由があると考えられる。そして、集落外への通勤を可能とする余部への道路とマイカーが御崎の暮らしを支える基盤となっている。

### 3.3 生活サービス施設と暮らしの実態

昔は、通学も買物も通院もすべて崖っぶちの山道を歩いて行くしかなかった。必然的に孤立した自給自足の暮らしにならざるをえなかった。道路開通後は、香住の中心部まで20分、豊岡や鳥取といった都市でも1時間圏内になり、但馬の他の集落と変わらない生活サービスを利用できるようになった。その実態を生活のいくつかの側面から考察する。

#### ① 交通

マイカーを利用すれば、御崎からはかなり広範囲に生活圏を広げることができる。とくに最近、香住から豊岡の近くまで自動車専用の高規格道路が開通したので豊岡方面はぐっと近くなった。この道路はさらに余部までの延伸工事が進行中で、完成後は香住や豊岡への時間距離はさらに短縮される。ただし、この京都府宮津と鳥取を結ぶ高規格道路が全線完成後は有料道路になるとされており、御崎の住民が通勤などに日常的に利用できるか疑問もある。また、御崎と余部を結ぶ道路も不安がないわけではない。2006年度中にも2度の土砂崩れがあり通行止めになったこともあるし、落石防止工事のために集落外の車が規制されたこともあった。数ヶ所の待避所以外ではすれ違いの困難な幅員がなく、大型車両が進入できないといった不便から、町道から県道に昇格させて拡幅整備をするように御崎の住民から要望が出されている。【図-15参照】

一方、マイカー以外の公共交通のサービスレベルはかなり低い。最寄り駅はJR山陰線の余部駅であるが、車が駅までアクセスできず徒歩で山道を駅まで登る必要があり、しかも本数も少ないため、ほとんど利用されていない。旅行に出る時も駐車場があり、特急の停車する香住駅を利用するようである。町民バスが香住～余部～御崎間を走っているが、1日に朝昼夕の往復3便しかなく、日曜・祝日は運休であり、しかも余部～御崎間は小型バスに乗り換える（大型バスは道路幅員が狭く通行できない）。主として幼稚園や小学生の通園通学や高齢者の通院以外にはあまり利用されていない。但馬地域全体にバスが公共交通の主役であるが、マイカーの利用が多いため、通学以外の乗車率はきわめて低く、過疎地域のバスは危機的状況にある。タクシー、自転車の利用はほぼ皆無、バイクもほとんど見られない。【図-16参照】

このように、マイカーがこの地域とそこでの生活を支えているとって過言ではない。高齢者や子どもたちは家族や近所の人の車に送迎してもらうことになる。また、近所の人についての買物を依頼することもある。このため、とくに主婦は、通勤、買物、送迎などのために車で一日に何往復もすることが日常になっており、車の運転が最も主要な家事となっている。全国の過疎地の中には、NPOタクシーやふれあいバスなどといったマイカーの同乗を制度化する例もあるが、17世帯しかない御崎ではこのような取り組みも難しいし、今のところは気兼ねなく助け合うコミュニティの互助精神でカバーされている。



図-15 御崎へのアクセス道路の土砂崩れ

2006年

唯一のアクセス道路は車のすれ違いが困難な幅員しかなく、南側は山、北側は急斜面で海となっている。簡易舗装はされているが、このような土砂崩れなど通行不能になることも多い。この場合、土砂を取り除くとさらに崩れるので応急的に迂回路を設けて通行している。



図-16 余部-御崎間を走る町民バス

過疎バス対策として、香美町が全但バスに委託して町民バスを運行している。朝7時53分、昼12時16分、夕方の4時26分の3本だけである。通園、通学のほか高齢者の通院以外はあまり利用されないが、集落に公共交通機関があるという安心感がある。



図-17 余部小学校御崎分校

集落の東の端の最も低い位置にある。夏季には低学年だけの3人、冬季には高学年を加えた7人が通学している。本校から教師が一人赴任して通勤してくる。

全国的に分校は次々と廃校になっているが、御崎分校は今後も入学予定の幼児がいるためその予定はない。

それでも給食サービスも運動場もあり、建物は伝統的な木造である。



図-18 唯一の観光施設、そば屋「平家の里」

15席程度の小さな店である。観光客が腰をおろして休めるところはここしかない。

このそば屋を抱きかかえるようにそびえていた背後の見事なタブの木2本は伐採されてしまった。

高齢独居を除くほとんどの世帯がマイカーを1~2台所有している。中には4台所有している世帯もあり、一家に1台というよりも、大人1人に1台となってきた。その他に、農業を営む世帯では軽トラックなどを1~2台所有している。これらはほぼ集落とその周辺だけで利用されている。各住戸の敷地にはガレージを設ける余裕はないし、街路が狭く段差があるため車でアクセスできない住戸が多いため、空地や道端を駐車場としている。

住民の意見としても、「車がなければ御崎の生活はできない」という意見が多く、「バスの便数が少なく不便」「子供の塾や習い事に車で送迎している」「近所の人を同乗させることが多い」といった意見もあった。御崎での生活は車によって支えられている、あるいは車に依存した生活であるといえる。

## ② 教育

幼稚園は余部にある余部幼稚園へ通園する。登園はちょうど町民バスが利用できるが、帰宅はバスの時間が合わないため親が迎えに行っている。幼稚園には2年保育もあり、一方、保育所は香住にしかないが、共働き世帯が多いにも関わらず祖父母がいるため保育所の利用は少ない。

小学生は余部小学校に入学するが、1~3年生の間は集落内にある御崎分校に通う。こんな小さな集落に分校が残っている所は全国的に珍しいが、御崎は子どもが比較的多く、今後の入学予定者もいる。先生が1人通勤してくる。給食も余部小学校から運んでいる。この分校は歴史があり、集落の人々の誇りでもあり、子どもたちも地元でのびのびと毎日を過ごしている。4年生になると余部の本校まで通うが、12月から年度末までの冬季は分校へ通う。本校までは幼稚園児と同様、町民バスで通うが、帰りは家族や近所の人を迎えに行っている。また、小学校高学年の子はほとんど香住にある塾へ通っている。これも親が送迎している。

### 【図-17参照】

中学校は香住にある香住第一中学校へ通う。中学生の通学はバスの時刻と合わないため、家族が通勤するときに一緒に車に乗せていく。冬季は他の過疎集落の生徒と一緒に香住にある寄宿舎で共同生活をする。中学生になると部活動などで帰る時間が遅くなる場合もある。毎日何回も繰り返す家族の送迎は大変な負担である。これも、都合が悪ければ祖父母や近所に頼むといった、同居家族やコミュニティの協力の強さといった御崎の特徴によって支えられている。

中学卒業後は主に香住高校へ入学するが、中には隣

町の浜坂高校へ入学する子もいる。高校生はほとんど家族に送迎してもらっている。

高校卒業後は就職する機会が多い。進学する場合も、大学よりも専門学校へ進学する割合が高い。大学は一つの短大以外は但馬を出て都会で暮らさなければならぬし、大卒の就職先を但馬で見つけることは至難である。大学進学は、ほぼ親元を離れ御崎には戻らないことと同意であり、本人にも家族にも抵抗感がある。

## ③ 買物

御崎集落内にある店舗はそば屋が一軒あるのみである。しかも主に観光客相手なので開店していない日も多い。しかし、ここでは集落住民の利便のため好意で洗剤や調味料などを買い置きしている。

### 【図-18参照】

日常の買物ができる最寄りの店舗は余部のAコープである。小規模ながら生鮮食品や食料品、日用品などが一応揃っている。香住まで出ると大型のスーパーや量販店があり、共働きの家庭が1週間のまとめ買いをするのによく利用する。買物の頻度としては、毎日行く家庭もあり、共働きの家庭は土日に週1回のまとめ買いもある。豊岡まで足を伸ばす人も多く見られる。通勤、送迎などのついでに買物することも多い。

衣料品、家具や電気製品など買回り品は、香住よりも豊岡や鳥取まで出かける人が多い。意外にも通信販売やネット購入の利用はほとんど見られないが、豊岡のコープではカタログ注文による週1回の配達サービスがあり、婦人会で利用している。

全体として、香住中心部の既存商店の利用は少なく、広い駐車場を備えた量販店中心の自動車型の買物生活となっている。

## ④ 生活サービス

御崎集落では、コミュニティセンターで定期的に健康診断や健康相談が実施されているが、医療施設はない。以前は余部に医院があったが現在はなく、医療サービスは香住総合病院などいくつかの医療施設のある香住の中心部まで出なければならない。総合病院には多くの科があるが、いくつかは鳥取大学や神戸大学からの派遣医師に依存しているため診察曜日が限られている。また歯科がないため、香住の街中にある個人歯科医院を利用する。利用頻度の高い歯科は近くに欲しいという意見が多い。その他、高度医療など鳥取や豊岡の病院を利用するという人も比較的多い。香住総合病院にはバスを利用できるが、時間が限られるため家族や近所の人に車で送迎してもらうことが多い。また、少子化の克服が課題となっている中で、香美町全体で

も産婦人科や小児科が少なく問題となっている。

高齢者・障害者福祉や子育てなどの福祉サービスについても、福祉センターなどさまざまな施設は香住中心部にあり、体育館やプール、図書館などの文化施設も香住中心部に集中している。御崎から日常的に利用するには遠く、またこのような都市的サービスへの需要があまりないこともあって、御崎の人はほとんど利用していない。ただし、デイサービスや在宅介護サービスなどは御崎でも利用できる。今のところ御崎の環境や生活が健康的であるためか元気な高齢者が多く、家族や集落の相互扶助の力もあるため、利用者は3人ほどである。

郵便物は集落内のある住宅前のポストで1日に1回収集され、宅配便も受け付けている。郵便局は余部にある。銀行は香住まで行かないとない。飲食店は御崎のそば屋の他、余部には数軒の喫茶店や食堂があるが、御崎の人が外食するのは特別の機会だけであり、豊岡や鳥取まで行くという意見が多かった。その他、本屋、クリーニング屋、理髪・美容院、パチンコ店などは香住にあるが、映画やゲームなどの娯楽施設の多くは豊岡や鳥取にしかない。しかし、これらの教養・娯楽施設の利用頻度は比較的少ないようだ。

#### ⑤ 社会サービス

御崎集落内には、コミュニティセンター、分校、下水の浄化センターがある。電気、上下水道、固定電話のサービスは完備されているが、ガスはプロパンを利用している。IT時代に求められる光ファイバーのネットワークはなく、携帯電話の電波も一部届きにくい。ただし、畑などの戸外活動が多く、車で走り回る生活のため携帯電話はよく利用されている。有料駐車場にゴミ集積場があり、週2回収集される。婦人会が当番制で記名した指定袋による分別収集を徹底させている。また、万一の火災には消防署からの出動は間に合わないで、消防団が組織され、ポンプ車の格納庫と2ヶ所の防火水槽が設けられ、ポンプ車の入らない街路にも4ヶ所に消火栓が配置され、火災に備えている。分校とコミュニティセンターが避難場所に指定されている。警察は余部に駐在所があり御崎まで巡回しており、香住には警察署がある。全国的な治安の悪化から、御崎分校でも「子ども110番の家」の指定や「子ども安全マップ」を作成しているが、集落全体で子どもたちを見守る雰囲気があり、外部から犯罪者が侵入する可能性は小さい。

行政窓口は、香住の香美町役場本庁に行くしかない。2005年4月の旧3町の合併に伴って、香住町中心部にあ

った旧役場は移転され、中心部や駅から少し離れた香住ICの近くのスーパーの隣に広い駐車スペースを備えた新庁舎が2006年11月に完成した。車を利用しなければかなり不便である。

以上のように、御崎の生活は、豊かな自然環境と以前のつつましい自給自足の生活をもたらすスローな生活に加えて、都市的な生活がかなりの広域生活圏を車で走り回ることによって維持されている。高齢化がそれほど進んでおらず、30～50代の壮年世代がそれを支えている。車を使えない高齢者や子どもはその送迎に依存している。壮年世代の負担は相当なものであるが、以前の孤立した不便な生活に比べると格段に改善され、都市部の生活と遜色ない生活レベルに達していること、他に選択肢がないことから、特に問題とは認識されていない。過疎地においてコンパクトな生活圏に必要な生活施設やサービスを十分に配置することには限界があるため、現実的な解と考えられる。しかし、過剰な車への依存は車を利用できない交通弱者にとっては大きなバリアを作り出すことになるし、自動車型の施設の増加は既存の市街地や公共交通の衰退をもたらし、さらに車への依存を強めてしまうという悪循環に陥ることになる。困難な条件下にある公共交通や施設配置の工夫も必要であると考えられる。

## 4. 御崎集落のコミュニティ

### 4.1 集落の歴史的コミュニティ

御崎集落が強固なコミュニティを維持してきた最大の要因は平家武将の末裔としての誇りであろう。平家再興を願っての隠れ里として始まり、その後もその誇りを代々受け継いできた。

門脇家、伊賀家、矢引家の平家の三武将の末裔が御崎で現存し、御崎の世帯の多くはそのいずれかを本家とする3系統の家系のいずれかに属している。それを証明する家系図があるが、武具などの遺産は火災などによって多くは失われている。また3系統に属さない世帯も何らかの姻戚関係でつながっている。ただし、こうした姻戚関係は何百年も経てきているので何代も前のことであり、一般的な意味での血縁関係とはやや異なる。このような場合、本家を頂点とする階層社会となることが多いが、御崎の場合は、住宅の位置や大きさ、格式などに格差は見られない。以前は、集落の運営負担金はそれぞれの世帯収入によって1～10級の階級制になっていて、生活水準の平準化も行われてきた。また、「親方制度」によって若い労働力を融通しあってきたし、御崎信用組合という相互扶助金融制度も作っ

てきた。きわめて条件の悪い御崎集落では階層社会を形成する余裕はなく、前述のように住民が結束し助け合っ、労働力を寄せ合っ生活しなければならなかつたのである。

また、こうしたコミュニティの結束は集落内にとどまらず、集落を転出した元住民も多くは先祖の墓を御崎に残し、集落内に親戚を持っている。そのため、墓の世話を依頼するかわりに転出後の空家や空地を集落の住民に無償で利用してもらう例が多く、以前の大火の時にもこうした元集落民が支援の中心となつた。次に述べる祭事や盆正月にはこうした元集落民が多数御崎に里帰りし、集落は賑わいを見せる。一軒に20人も親戚が泊まることも珍しくない。

こうした集落の結束を象徴するのが御崎最大の祭事である「百手の儀式」であり、毎年1月下旬に催される。百手の儀式は平家落人伝説にまつわる最も重要な行事として位置づけられており、平家の無念を受け継ぎ、士気を鼓舞して平家再興を夢見て続けられてきた。平家の三武将に扮した青年や子供などが平内神社までの道を「ひかえ、ひかえ、脇によれ」と掛け声をかけながら歩き、神社では、前日に採取した竹で手作りした弓矢で源氏を模した白地的的に101本射するというものである。この祭りには集落の住民が仕事を休んで総出で参加するだけでなく、親戚や御崎に縁のある人を初め、マスコミ、カメラマニアなど多くの観光客も訪れる。この祭りによって、御崎の歴史、御崎の住民としてのアイデンティティと誇りが代々受け継がれてきたのである。[図-19、図-20、図-21参照]

御崎集落の年中行事としてはこの他に、5月の灯台祭り、7月の夏祭り、10月の秋祭り、11月の日本の灯台記念日祭りがある。それぞれ集落のコミュニティ団体が分担して、少ない住民で行事を持続して運営してきている。集落住民の多くはこうした行事を大切なものと認識しており、仕事の都合をつけて率先して取り組んでいる。しかし、集落外での都市生活が長く、日常も昼間はほとんど集落にいない人にとっては、職場中心の生活になりがちで、こうした行事や住民団体への参加が負担に感じられる傾向も見られないではない。今後はそうした傾向が増えることも考えられる。

#### 4.2 集落のコミュニティ組織

御崎の最も基盤的な住民組織は自治会である「区」であり、区長が責任を負っている。行政の末端組織としての役割も持っている。区長は集落をまとめるだけでなく、行政や他の集落との交流、集落内の各種団体の活動の調整、集落の問題の把握や行政への要請など

多種多様な仕事を献身的にこなさなければならない激務である。

その他、御崎集落には、老人会、婦人会、こども会、農協、漁協、氏子組織、檀家組織、青年団、消防団がある。集落住民の数が少ないこともあって、住民のほとんどがこれらの団体に複数所属している。集落の行事やさまざまな活動はいずれかの団体が単独でもしくは共同で分担している。祭りなどすべての団体が協力する大きなイベントになると、家族それぞれが各団体から動員され、結局家族総出、集落総出の取り組みになる。

老人会ではお年寄りが定期的に集まる「サロン灯台」と名づけられた「ふれあいサロン」を催しており、花壇の手入れ、健康相談会、クリスマス会などのイベントを開いたり、写経、押し絵や囲碁・将棋などの趣味活動を行っている。婦人はゴミ集積場や排水溝、公民館の清掃などを担当している。青年団は一時活動が停滞していたが最近また活動を再開し、高校生も加わって、余部地区の文化祭やクリスマス会などに積極的に参加している。

2005年に新設されたコミュニティセンターは畳敷きの座敷スタイルの会議室や調理室、シャワー室、トイレ、洗面所などが備わっており、各種団体の住民活動の拠点として役立っている。ここは、災害時の避難場所になっているので、日ごろから集落のみんなが利用していることは意味がある。[図-22参照]

余部や灯台に通じる道路の清掃や草刈りは主に集落住民が行なっている。町道なので都市的なセンスで言えば行政の守備範囲であるが、役場にはその余裕がないこともあり、元々集落住民の勤労奉仕によって完成した道路であったという経緯もあり、伝統的に区が担当している。何キロにも及ぶ大変な作業であり、年に1～2回、老人会、婦人会、青年団など各団体、御崎の住民が総出で清掃を行なう。

ほとんどの住民は集落コミュニティの一員としての所属意識が高く、こうした集落の地域活動には都合をつけて積極的に参加している。こういった活動に消極的な若い人も説得すると案外快く参加してくれている。そして、こうした活動を通じて住民相互のコミュニケーションがはかられ、良好なコミュニティを維持することになっている。ここまで活発な活動は香住地区の中でも他の集落では見られなくなっている。

こういった活発なコミュニティ活動を支える基盤は、落人集落として代々何百年も住み続けてきた歴史と伝統をもつ御崎がふるさとだという誇りがあるからだろ



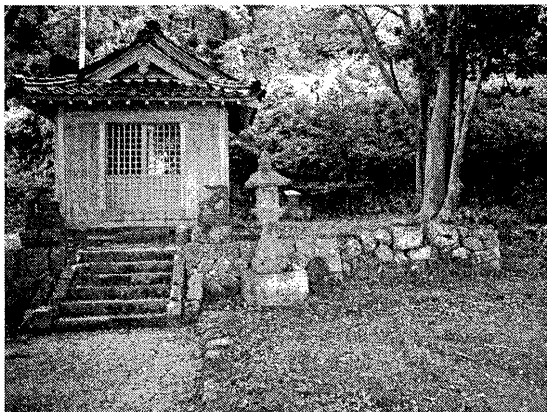


図-19 平内神社

小さなお社であるが、集落の歴史を物語り、集落住民の心のよりどころとなっている。左手に立派な鳥居があり、手前には相撲の土俵がある。百手の儀式はここで行われる。



図-20 「百手の儀式」の行列

袴で正装した三武将に扮した若者が弓を手に集落のメイン街路をかけ声をかけながら、観客が待ち受ける平内神社をめざして練り歩く。

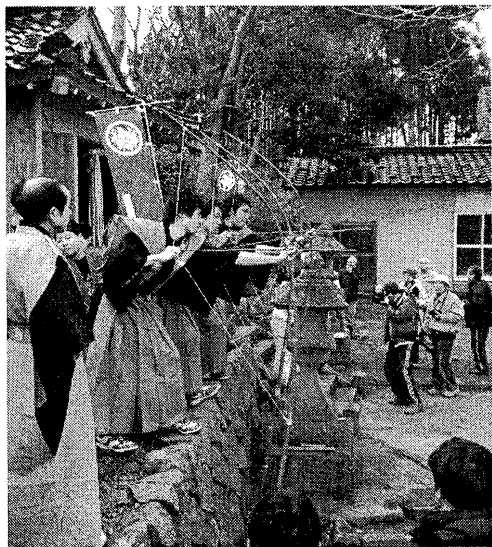


図-21 「百手の儀式」の射的

射手の若者が 101 本の矢を源氏を模した白的的に次々と射る。最後には的はボロボロになる。若者にとって今さら平家再興はないが、御崎の歴史を再認識し、集落コミュニティへの帰属意識を再確認する機会となる。



図-22 コミュニティセンター

集落の中心に新築された。小さな集落にしては立派なものである。下見板張りではあるが、伝統的なデザインではない。この集会室からの海の眺めは絶景である。

う。また、きわめて困難な条件下で先祖が大変な苦勞の末に今日の御崎を築き維持してきたことに対する敬意もあるだろう。そして、素晴らしい景観と住み慣れた居住空間、協力しあう親密な家族関係やコミュニティ社会の良さを評価してのことだろう。

とはいえ、次第に都市的な生活様式や生活意識が広がってくると、若い世代を中心にこのようなコミュニティ活動を負担に感じる傾向や、負担だけでなく、コミュニティが私的な生活に干渉し束縛するものと感じる傾向も一部には生じている。また、住民の数が減ったことも活動の維持をしだいに困難にしている。元区長などこれまで集落コミュニティを支えてきた人たちも御崎のコミュニティの将来に危惧を抱いていないわけではなく、若い世代に伝える努力をしている。例えば、余部小学校では、「ふるさと教育」というものがあり、御崎や余部の住民が子供たちに昔のできごとや歴史などを話す取り組みである。こうした活動によって次世代のふるさと意識を育もうとしている。

## 5. まとめ—御崎集落のこれから

御崎集落がその長い歴史の中で、とくに近代以降の幾度かの危機を乗り越えてサステナブルなコミュニティとして住み継がれてきた条件を考察してきた。

それを要約すると

- ・集落の歴史、伝統文化に対する住民の誇りと愛着、およびその継承努力
- ・優れた自然景観、魅力のある集落景観
- ・集落環境がもたらしたスローな生活に加えて、集落アクセス道路の整備とマイカーが支える都市的レベルと遜色のない生活サービス
- ・多世代同居による次世代の再生産とバランスの取れた世代構成
- ・多世代同居が可能にした家族総働きによる世帯所得の確保
- ・歴史的経緯、過去の困難な生活条件、親戚関係、活発なコミュニティ活動、歴代区長などのリーダーシップが育んできた強固なコミュニティ。それは集落内だけでなく、集落を転出した元集落住民を含んでいる。以上のようにまとめることができる。

ところが、香美町の他の多くの集落は衰退し、限界集落に、消滅集落になろうとしている。御崎もこうした条件が失われればその轍を踏む可能性もある。御崎集落の世帯や住民の数は限界に近いと考えられる。さらに減少が続けば、こうした条件は失われ、集落の環境やコミュニティを支える力が失われる。

これからの御崎集落のあり方を展望する上で重要ないくつかの点として、以下のことが考えられる。

- ① 集落を出た（これから出る）若い世代あるいは定年世代が集落に戻ってくる条件をさらに整える
- ② 環境収奪型のマス観光は好ましくないが、集落の景観を整え、集落の魅力をじっくりと楽しむ小規模なスローな観光は、集落住民や元住民にとっても集落の活気と魅力を高める意味で有効である。
- ③ 集落とは無関係の部外者の来住は今までは見られなかったが、田園居住ブームの今後は、空家や空地を利用したセカンドライフやセカンドハウスの舞台として、芸術活動のアトリエとして需要が生じることも考えられる。こうした場合も、集落の環境とコミュニティの秩序を守ることが前提となる。
- ④ 従来、集落の環境整備は貧しい状況を脱し、都市化することを目標に進められてきた。しかし、例えば、下見板張り・黒の塗り瓦の伝統的木造住宅から都市と変わらないサイディングとルーフィングの住宅へ、石垣からコンクリート擁壁へ、邪魔な巨木の伐採へと集落環境の魅力を減じる傾向も目につく。集落住民自身が御崎集落の魅力とは何かという認識を高める必要がある。
- ⑤ 以上の諸点を総合的に進める上で「御崎憲章」の制定が有効な方策ではないだろうか。憲章の制定を通じて集落コミュニティの意識と連帯を大いに高めることができるし、集落外からの圧力に対しても集落環境を守る上で有効と考えられる。

例えば、以下のような「御崎憲章」が考えられる。

### 「御崎憲章」(案)

御崎憲章は香美町御崎地区を維持、発展していくために、その意識を高めその基盤を形成すること、御崎地区における景観を保護していくことを目的とする。

- ・御崎を愛し、自然と歴史を誇りに思います。
- ・御崎に住む老若男女はみな、御崎をふるさとと思う人もともに助け合います。
- ・知恵と力をあわせて住みやすい御崎をつくりまします。
- ・日本海の絶景、曲がりくねった坂道、下見板張りの伝統的住宅建築など集落景観を大切にします。
- ・大木を守り、緑と花を育てます。
- ・集落を訪れる人を温かくもてなします。

<謝辞>

本調査研究にあたっては、御崎地区には幾度も訪問させていただき、調査やヒアリングに快く協力いただきました。中でも元区長の岡辻増雄さんには貴重なお話を聞かせていただきました。また、田尻幸司さんをはじめ香美町役場の方々には、合併直後、新庁舎への移転という多忙な時期にもかかわらず、統計データや資料の収集に協力いただき、宿泊場所の提供など調査活動にもさまざまな便宜をはかっていただきました。さらに、兵庫県立大学環境人間学部の三宅康成准教授には農村集落の問題について基本的なレクチャーをしていただきました。深く感謝します。

なお、本研究調査は、依藤智子、岩倉洋行、伊東美穂、金光志樹をはじめ兵庫県立大学環境人間学部松本研究室の学生たちの協力によって実施できたこともあわせて感謝します。

<参考文献>

- 『図説 集落』  
竹添通徳、日本建築学会、都市文化社（1989）  
『わたしたちのかすみ』  
香住町教育委員会、（1992）  
『兵庫県民俗調査報告書 但馬海岸』  
兵庫県教育委員会（1974）  
『中山間地と多面的機能』  
田淵俊雄、農林統計協会（2002）

（平成19年9月28日受付）